ふと気がついてあたりを見まわすと、わたくしはまだうす暗い石油ランプの光をあびながら、まるであのかるたの王様のような微笑をうかべているミスラ君と、むかいあってすわっていたのです。

わたくしがゆびの間にはさんだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっているところをみても、わたくしが一月ばかりたったと思ったのは、ほんの二、三分の間に見た夢だったのにちがいありません。けれどもその二、三分のみじかい間に、わたくしがハッサン・カンの魔術の秘法をならう資格のない人間だということは、わたくし自身にもミスラ君にも、あきらかになってしまったのです。

わたくしは、はずかしさに頭をさげたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「わたくしの魔術を使おうと思ったら、まず欲をすてなければなりません。あなたはそれだけの修業ができていないのです。」

ミスラ君は気のどくそうな目つきをしながら、ふちへ赤く花もようをおりだしたテエブルかけの上にひじをついて、しずかにこうわたくしをたしなめました。

（大9・1）